208

二〇一三年度　入学試験問題

法学部A方式Ⅰ日程・文学部A方式Ⅱ日程・経営学部A方式Ⅱ日程

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

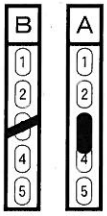
マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はＨＢの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

(一)　正しいマークの例

(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

二〇一〇年の第二四半期（四月―六月）のGDP*で、日本がはじめて中国に追い抜かれたというニュースを、旅行中のパリのホテルの朝食の席、ル・モンド紙とインターナショナル・ヘラルド・トリビューン紙二紙の第一面記事で見た。私の最初の反応は、なんだか、肩の力が抜けて、［　X　］、というものである。

日本には、右肩上がり、という表現がある。グラフで去年よりは今年、今年よりは来年と上向し続ける線を、人体になぞらえた表現だが、いつまでも右肩上がりでは、半身しかないことになる。自分の全貌が見えないではないか。八月一七日のインターナショナル・ヘラルド・トリビューン紙の第一面には、そういう日本人好みのグラフが載っているが、日本のGDPは、一九九〇年代前半にピークを迎え、その後、右肩下がり、あるいは横ばいに転じる。ようやく、見えなかった半身が、捉えられはじめた。顔は見えないが、どこに肩口があり、日本がいるのか、わかる。私の「安心」は、その全身の確認からくるものだろう。つまり、[1]そういう日本が、いま、新たな半身だけの巨人に追い抜かれようとしているのである。

このような安心感の背景はどこにあるだろうか。

同じ関心でグラフを探せば、同型の動きを示すグラフが他にも見つかる。一つは日本の人口自然増加率のグラフである。それは、一九〇〇年以来、ずうっと一パーセント台の一桁台をキープしてきた。でも、一九七七年にはじめて小数点以下へと落ち込むと、以後減少傾向に歯止めがかからず、二〇〇五年には、マイナスに転じ、マイナス〇・二パーセントまで落ち込む。右肩下がりとなる。

もう一つは、米の総生産量。一八七八年から一九八〇年までの米の総生産量の五年ごとの折れ線グラフが、一九六〇年代を境に、下降し、右肩下がりになる。日本社会は、有史以来、右肩上がりできた米の生産量を、一九七〇年前後、はじめて下降に転じる。

つまり、日本は、中国から追い抜かれるだいぶ以前から、その心的な準備態勢に入り、いわば飛行機でいうところ[2]軟着陸の

準備をはじめてきたのである。

三年前(二〇〇八年)、日本の名高いニュースキャスターである久米宏が主宰したテレビの特別番組が、興味深い若者の生態を明るみに出した。その主題は「消費しない若者たち」という。それによると、いまの日本の一〇代後半から二〇代前半にかけての若者は、車を持たない。酒を飲まない。また、クリスマスに恋人と豪華なシティ・ホテルで一夜を過ごすということもない。アルバイトに精を出し、コーヒーが一五〇円という激安のマックで、何時間もねばり、吉牛(牛丼の吉野屋)で、昼をすます。残りの金は、どこにいくのか。彼らは、それを将来を担保するための貯金に回すのである。

この驚くべき消費行動をささえているのは、一九九〇年代前半のバブル崩壊以後に、小学生となり、以後、一度として、繁栄する日本社会に出会っていないという彼らの世代的経験である。いまや世界に類のない高齢化社会の到来のなかで、現今の日本の若者は、将来への不安を体内に埋め込んだ、たぶん明治期以来最初の日本人世代として浮上してきているのである。

この右肩下がりの時代の経験は、環境、資源、人口をめぐる世界の有限化傾向の高まりと相まって、日本社会に、[3]有限性と閉鎖系の世界の感性ともいうべきものを、いち早く、主に若者を中心に醸成(じょうせい)しようとしているかに見える。ニューヨーク、パリを闊歩(かっぽ)する日本語しか話さない日本人の若者の姿は、いまも健在だが、現在の日本人の若者は、以前に比べ、だいぶ、外国に行きたがらないようになったとも指摘されている。グローバリゼーションとインターネット社会の到来は、日本社会に英語を公用語にせよ、という主張を生み、英語学校を数多く作り出す一方で、いや、日本はもともと資源もない、小さな国なのだから、そこそこでいいだろう、という、感性上の新しい成熟のかたちをもたらそうとしているのである。

世界の人口は爆発的に増え続けており、石油をはじめとする各種資源の限界、地球環境の有限性が明らかになっている。

Y 。一九六〇年代の企業戦士の時代ではないのだから、世界第二位、でも、世界第五位でも、世界第一五位でも、かまわない。それよりかは、もう少し、恵まれない人々、貧しい国のことも考えたい。あるいは、エコロジー、有機農業などについて考えたい。あるいは、自分のことだけで手一杯。でも、その方が、まだしもクールだ、とその新しい感性は、言う。

とはいえ、むろん日本社会をささえてきたし、いまもささえている指導者層は、それとは違う考え方の持ち主たちである。

おそらく日本の年老いた政治的、経済的なリーダーたちは、今回のニュースに、危機感を募らせ、中国に負けてなるものか、と考えている。彼らは右肩上がりの社会のもとで人格形成し、世界と張り合い、誰がナンバー・ワンであるかをつねに気にしてきた。その傾向は、変わらないだろう。しかし、そもそも、一つの発育過程が停止してはじめて、成熟がはじまるのであれば、右肩上がりが終わり、[4]いま、この社会にある成熟がもたらされようとしているのは、たしからしく思われる。

面白いのは、そういう成熟を、日本では、年老いた老人たちではなく、若者たちが体現しはじめていることだ。そして、それが若者にささえられるから頼りないとも、一概には言えない。というのも、その背後に、この社会は、江戸という二五〇年を超える自己閉鎖の社会経験を、有しているからだ。明治期以降、百数十年間、日本は拡大志向で他国に向かって膨張してきた。若い国であり続けてきた。しかし、それに倍する期間を、日本はいわば自己の縮小の経験のなかで過ごしてきている。しぼみと老成の経験をもっているのである。いま、中国に抜かれ、下降傾向を示す日本が、有限性を露わにしつつある世界のなかで、今度は、成長の停止という、新しい方向への成長を示唆しているのであれば、これから、この中国に追い抜かれ、右肩下がりになるだろう他の社会にとっても、よい前例となるだろう。

（加藤典洋『3・11　死に神に突き飛ばされる』より。文章を一部改変した）

【注】＊GDP　国内総生産。Gross Domestic Product の略。一定期間内にある国の国内で生み出された付加価値の合計を指し、その国の経済規模を示す指標としてもちいられる。

問一　本文中の空欄 X に入る語句として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　ほっとした　　イ　呆然とした　　ウ　陶然とした　　エ　びっくりした　　オ　がっくりした

問二　傍線部1「そういう日本が、いま、新たな半身だけの巨人に追い抜かれようとしている」とはどういうことか。それを説明したものとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　世界では例外的に経済成長を止めてしまった日本が、中国をはじめ成長を止めずに巨大化していく他の国々にどんどん経済規模で追い越されていくということ。

イ　右肩上がりをつづけて成長しか知らなかった時期を終えた日本が、これから成長をつづけていく時期を迎えるであろう中国に経済規模で逆転されていくということ。

ウ　右肩下がりを経験し自らの位置を見出した日本が、右肩上がりしか経験せず自らの位置を見出すことができない中国に、いつのまにか経済競争でその後塵を拝しているということ。

エ　人口自然増加率や米の総生産量といった数値ですでに社会が縮小していくという半身を示していた日本が、ＧＤＰで中国に追い抜かれることでその全身を現わしたということ。

オ　右肩上がりで世界の経済成長を牽引してきた日本の役割が、これからは日本に追いついた中国によって担われ、今度は日本が牽引されていく立場になるということ。

問三　傍線部2「軟着陸の準備をはじめてきた」とは具体的にどういう内容を指しているか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　日本が実は一九七〇年代には経済成長を目指そうという意欲を手放し、経済規模を拡大しつづけている中国と競争しようという意志をもたないようになっていたということ。

イ　すべての国が経済成長をしつづけることはできないという世界の現状を認識した日本が、これから経済成長をしていく中国と入れ替わる機会を以前からうかがっていたということ。

ウ　日本が人口自然増加率や米の総生産量の数値において社会としてもう成長しないというあり方を示し、経済規模がこれ以上拡大しないという現実を受け入れる体勢を整えてきたということ。

エ　これまで経済規模で凌駕してきた国々に追いつかれるという経験をする前に、日本は人口自然増加率や米の総生産量を減少させることで、その衝撃に耐える心理的な訓練をしてきたということ。

オ　経済規模を示す数値において中国と並ぶ瞬間に備え、少しでも身軽でいられるように余計な消費をしない生き方を、日本が若者たちを中心にして模索してきたということ。

問四　傍線部3「有限性と閉鎖系の世界の感性」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人間が地球環境から得られる資源には上限があるということを意識し、車でも酒でも必要以上の消費をすることは慎んで、いまここで欲望を解放せずに資源が枯渇する将来に備えなくてはならないという感じ方。

イ　人類が共有できる資源は有限であるからこそそれを獲得する競争が必要であり、地球環境が閉鎖したものであることが明らかな現在、ますます熾烈になっていくその競争に日本はぜひ勝たなくてはならないという感じ方。

ウ　もともと日本は石油をはじめとする天然資源が乏しく、自国の力だけで外国と自由に行き来できるような開放的な環境にはないので、実は江戸時代のように閉鎖的な社会で生きるのが自分たちの身の丈に合っているという感じ方。

エ　ある社会の経済規模にはその人口と国土の環境に応じた限界があり、それ以上経済成長できないという閉塞状態がかならず到来するということを認識し、今後の世界ではだれもがその不安のなかで生きなくてはならないという感じ方。

オ　世界の人口が増えているにもかかわらず人間が利用できる資源はこれ以上拡大せず、人間が生きる地球環境にも限りがあるということを前提に、そろそろ経済成長を目指さない生き方をしてもよいのではないかという感じ方。

問五　本文中の空欄 Y に入る文として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　もう、右肩下がりでもあるまい

イ　もう、右肩上がりでもあるまい

ウ　もう、右肩下がりを我慢するしかない

エ　やはり、右肩上がりを目指さなくてはならない

オ　やはり、右肩下がりを目標にしなければならない

問六　傍線部4「いま、この社会にある成熟がもたらされようとしているのは、たしからしく思われる」とあるが、筆者が考える「成熟」した「社会」とはどのようなものか。本文全体の内容を踏まえ、三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問七　この文章の題名として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　縮小する世界　　イ　江戸時代への回帰　　ウ　「消費しない若者たち」の実態

エ　「追い抜かれる」という新しい経験　　オ　右肩下がりの日本と中国の脅威

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

近頃はしばしば「からだとこころ……」という言い方を見聞する。「からだとこころの健康」などの言い方は、明らかにそれぞれを異物として前提しており、しかし、その二つの別もの、あるいは別々の現象を、統合することが大切だという暗黙の志向を内在させている、と言っていいだろう。一般的に心理学畑の人々は、「からだ」は「こころ」の現れである、あるいは「こころ」を探る手だてとして、それに関心を向けている、といった無自覚な［　X　］論的態度が前提となっていて、統合という視点までは視野は届いていない、と感じることも多いのだが、この場合「からだ」とは、ほとんど、物質としての量と外延とを持つ「肉体」を指している、と言っていい。

「表現」と言う場合も、内なる「こころ」を外なる形に現すこと、と一般に考えられている。ここにも「こころ」が本体で肉体という客体は道具乃至（ないし）素材だとする素朴な常識が潜在している。

仏教学者の金子大栄氏は大無量寿経*における弥陀の四十八願の講義において、世に「触光柔軟の願」と呼ばれる第三十三願中の「我が光明を蒙りて其の身に触れん者」という文言に首をかしげている。なぜ心に触れると言わずに「身」に触れる、と言われたのかわからない、というわけである。私流に乱暴に言ってしまえば、光を浴び光に触れるのは「身」にきまっているではないか、ということになるが、金子氏の疑念は、「光明」ということ自体を比喩としてしか解釈していない、近代主義というよりほかない姿勢であって、仏のことばの根底をなす身心一如のイメージを、全く体感していないということを示すことになるだろう。［　X　］、精神優位の姿勢には「身」など目に入ってこないのである。

実のところは、「身」と呼ぼうが「心」と名づけようが一向にかまうことはないのである。[1] 意識に上らぬ領域を含めての、全存在のことなのだから。だが金子氏のしきりに説く柔軟な「心」などという実体が、「身」を離れてどこに浮遊しているというのだろう。私は近頃いささか疑い深くなって来ているのだ。

そもそも感覚という現象からして、人類学者の藤岡喜愛氏がいう「生命をもつ我々のために有益かどうかを示す記号乃至信

号の役を果たす」実践的機能がある、とすれば、これはまさに「からだ」の動き方乃至はたらきと呼ぶべきものだろう。藤岡氏は、動物行動学者ローレンツが、アメーバのような極原初的な生きものでさえ、「自分の食物になりうるものだったら大きいものでもその周囲を泳ぎ回ってむさぼる」、という現象を取り上げて、まさに氏の主張するイメージ・タンクの原初の形とされている。そう名づけることによって我々に見えてくるものの大きさは重要だが、私から言うと、このアメーバの動きこそ、「存在」が、世界あるいは対象と関わりあう仕方の原型であり、「からだの動き」(action)そのものということになる。これにどう名をつけるか、によって思惟の道筋が大きく変ってゆく、ということでもあろう。となると、問題は[2]「名づけ」即ち「ことば」の次元に移行することになるだろう。

モノがそこにあるから、それに「石」と名づけるわけではない。さまざまな現象にふれ入り混じる(私たちの)体験の中から、ひとつの共通性あるいは包括性を感じ取った時、それに距離を取り、対象化して「いし」とか「はる」とか名づけをする。その時、石や春が存在し始めるのだ。

すると、「悲しみ」とか「怒り」とかいう名づけも、身の内の激しい動きに距離を取り、対象化しうる状態に至った時、初めて行うことができるのだ、と言いうるだろう。根源的な「からだの動き」そのものには、まだ名をつけることができない、のであろう。となると、「こころ」という包括的な名は対象化され意識された限りの自己存在現象のさまざまな様相や変貌を丸がかえにして、一くるめに名づけたもの、といったことになるようだ。が、しかし、意識されるのは感覚や情念の動きや思惟ばかりではない、みずからのからだの傾き、喘ぎ、相手に牽かれる力、はねのける動作、みな同様である。

となると、「こころ」に対応して「からだ」が名づけられることになる。この対象化された「からだ」はモノとして現れる。即ち「肉体」である。だが、私にとって、「からだ」とは、まず「私」のことだ。「私」は「からだ」としてここに在り、世界に棲む。「からだ」として他者に向かいあって立つ。即ち、第一義的に「主体」であり、かつ、モノである。ということは「からだ」という「名づけ」は、単なる客体としての限定を超えて、主体としての意味を賦与し、主体を奪回すること、つまりは、主体であると同時に客体であるところの、両義的な存在として「からだ」を定立させるのだ、と言えようか。その時初めて、「からだ」はみずか

ら風の触れるのを感じ、他者の目の動きに沿って近づいてゆき、「からだ」が思量し「からだ」が呼び掛け、跳びかかる、のだ。

チェーホフの『三人姉妹』の第一章に、「なんだってわたし、今日はこんなに嬉しんでしょう」という末娘イリーナのセリフがあるが、「嬉しい」ということばは、「なんだってこんなに」ということばに先行されている。ということは、イリーナはなぜ「嬉しい」のか自覚していない、ということである。まだ未分化なからだ全体の感じを仮に名づけようとすると「嬉しい」という単語が浮かび上がって来た、ということに過ぎない。我々が日常に使う「嬉しい」ということばは、「新しい服を買ってもらったから」「うまい酒が呑めたから」「好きな人に逢えたから」等々、なぜ「嬉しい」のか、原因がはっきりしているのが常である。そのように確定された「嬉しい」の呼吸、発声、発音、ひっくるめて「言い方」が、イリーナのこのことばと異次元にあるのは明らかだろう。

老人とのやりとりの後でイリーナは語る――「きょう目がさめて、起きて顔を洗ったら、急にあたし、この世の中のことがみんなはっきりしてきて、いかに生くべきかということが、わかったような気がしたの」――以下は略すが、一人の少女が、ある朝不意に、人生と世界に対して、目を見開く、あっと思い、まじまじと人生と世界に見入る。そのしんとした全身心の昂(たかぶ)りに、なんと名をつけたらよいのだろう。長姉のオーリガは、これを語るイリーナの表情を「その真面目な顔といったら！」と評する。かの女は既知の、パターン化した「よろこび」の中で浮かれているのではない。むしろ生真面目に、全身をはりつめて、未知の世界に舟出してゆく風の誘いを聞いているのである。

「嬉しい」ということばは、口ごもって口ごもってやっと見出された時、むしろ「哀しい」と呼ばれても不思議はなく、ある存在の変容のせつない自覚である。ここではまさに「ことば」は「事の端」であるだろう。だが「嬉しい」と選ばれたことによって、かの女の「ことば」は次へ発展する。あるからだの志向、動き出す方向が顕在化してくるのである。こうして「ことば」は「からだ」から離陸しからだを導いてゆく。

「ことば」とは、「からだ」＝全存在の志向と身動きが生み出し、分泌し、そしておのれに対峙させるもの、と言うことができようか。みずから生み出したそれと対立し、それに導かれ、それを裏切りつつ「からだ」は生き進む。この意味で分泌された「こ

とば」とは「からだ」の志向を仮定するものであり、それ故に、[3]それに拠って選ばれる行為は常に一つの賭である。

スイスの精神科医であるビンスワンガーは、「ことばが沈黙する時、からだが語り始める」という有名なテーゼを語ったが、私から見れば「 Y 」のであって、かれの言い方は聞くものにとって、ことばが聞こえなくなる時初めて見えて来る「からだ」(の動き)があるということであろうし、また、ことばを発する主体から言えば、ことばが「詰まる」ことによって拡大してくる「身動き」がある、ということにもなるであろうか。いずれにせよ、「からだ」の対極に「ことば」を置くと見えて来る地平に私は生き始めており、「からだとこころ」を対にする地平は私に遠い、というよりは、そこには生きていない、と言うことであろう。私は心理学も言語学も門外漢であるから、以上の論述にはいずれ大きな盲点も、あまりに素朴な思い込みもあることであろう。だが体験をことば化しつつ整理してゆくよりほかに方法をもたぬ実践者に、見えて来始めている地平の一部を粗描してみたのである。

(竹内敏晴『思想する「からだ」』より。一部文章を改変した)

【注】 ＊大無量寿経　浄土教の根本聖典の一つ。この仏典には、仏の修行のために立てられた四十八の願が説かれているが、「触光柔軟の願」はその一つで、仏の光明に触れると柔和な心を給わるという願。

＊イメージ・タンク　人間とは、これまで体験したこと、得た知識、そしてそれらの組み合わせたイメージを蓄えた世界そのものである、と考える言説。

問一　本文中の空欄 X に共通して入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　身心相反
イ　身心融合
ウ　身心矛盾
エ　身心一元
オ　身心二元

問二　傍線部1「「身」と呼ぼうが「心」と名づけようが一向にかまうことはない」とあるが、その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　「心」は、明確な形で客観化されることなく存在し、「身」と一体となってあるものだから。
イ　「心」は、けっして表立って感情を語っておらず、あくまでも「身」の内に包含されるものだから。
ウ　「心」は、「身」の動きを通すことで感情を表現でき、あくまでも「身」に従属するものだから。
エ　「心」は、「身」から離れて存在することはできず、常に「身」全体を包みこんでいるものだから。
オ　「心」は、不明瞭な感情として生まれるが、すぐに「身」として実体化されるものだから。

問三　傍線部2「名づけ」即ち「ことば」の次元に移行する」とあるが、その「次元」で起こることの具体例として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　飼犬の死に直面して思わず涙を流した母の姿に心をうたれ、日記に書き留める。

イ　不誠実な応対をされたことに対して、名状しがたい気持ちを覚え、抗議の電話をかける。

ウ　国内最高峰の絵画展で入賞したことについて感想を聞かれ、「嬉しく思います」と答える。

エ　桜の開花がテレビのニュースの中で告げられると、多くの人が「春」の到来を感じる。

オ　新しく発見された固形物が、長い年月を経て、いつのまにか「石」と呼ばれるようになる。

問四　傍線部3「それに拠って選ばれる行為は常に一つの賭である」とあるが、なぜ「賭」といえるのか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　「からだ」から生み出される「ことば」は、複数ある可能性から「からだ」の在り方を規定するものだが、的確な感情として「からだ」を規定しているとは限らないから。

イ　「からだ」から分泌される「ことば」は、「からだ」から距離をおくことで新たな可能性を生み出すものなので、「からだ」を特定の「ことば」と結びつけてしまうのは無理があるから。

ウ　「からだ」から離れていった「ことば」は、常に「からだ」と対立することで新たな可能性をひらくものだが、実はどの「ことば」が選ばれるかは人知が及ぶことではないから。

エ　「からだ」を顕在化させる「ことば」は、「からだ」から離れることで真の意味を帯びるものなので、「からだ」と密接な関係がある段階の「ことば」は、あくまでも仮のものだから。

オ　「からだ」の動きを仮定する「ことば」は、無限にある選択肢の一つにすぎないので、「からだ」を「嬉しい」といった特定の感覚と結びつけることは避けるべきことだから。

問五　本文中の空欄 Y に入る語句として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　からだが沈黙する時、ことばが語り始める
イ　ことばもからだも常に語っている
ウ　ことばもからだも常に沈黙している
エ　からだは常に語っている
オ　からだは常に沈黙している

問六　筆者は、「からだ」をどのようなものと考えているか。つぎの形式に従って、三十字以上、四十字以内で解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

「からだ」は、［　　］ものである。

〔三〕 つぎの文章は新井白石『折たく柴の記』の一節である。本文中の「予洲」とは、新井白石の父が仕官していた土屋家の主人頼直をさす。これを読んで後の問いに答えよ。

我二十三歳の夏の頃、ア予洲の家滅びしかば、前*にしるせし事のごとく、イ我が仕への途もおのづからひらけたり。かくて、筑前守紀正俊朝臣にすすめしものありて、二十六歳の三月に、ウ彼の朝臣のもとに出でて仕ふ。一年を隔てて、我二十八歳の秋、*筑州の事おはしまして、その嫡男下総守正仲朝臣、彼のあとをつがれ①しかど、不幸の事のみ打ち続きて、後にはエ家人等を扶助すべき事も意のままならず。皆々その禄米を減ぜられしほどに、禄を辞し去るものどももすくなからず。オ我はじめ出で仕へしよりこのかた、彼の父子にしられし身にもあらねど、およそは［A］となり、［B］となれる②ものの、1かかる時に至りて、はなれさるべき事にあらずと思ひし③かば、わづかに妻*孥の餓ゑをまぬかるるのみにて、2心にもあらぬ仕へにしたがひゐたり。されど、いとま多かる身なりしかば、この時にこそ経*史の類をも渉猟せし事はありつれ。貧は士の常などいふ事あれば、私の事においては、いかにも堪へ忍びしかど、仕へにしたがふ身には、そのほどにつけてなすべき事ども多ければ、つひには財尽き力窮りて、三十五歳といひし春に至りて、ありし事ども書きあらはして、身のいとまを給はるべき由を申す。したしかりしものどもには、かねてよりかく思ひたちし事を語りたりけるに、「禄米あれば、餓ゑに死するまでの事はあらず。かくまで財力尽きはてし人の、禄をも辞して去らむには、一日の餓ゑをすくふべき助けもあらじ。3我が身こそかくまで思ひたち給ひたれば、いかにもおはすべき事なれ、若き妻幼き子どもの事をば、いかにし給ふべき」など、いふ事どもありしかど、「4頼みし人の不幸の事どもおはしまさずは、我今までかくてはあるべからず。この年頃、堪へがたき事をも堪へ、忍びがたき事をも忍びしは、［A］となしまゐらせ、［B］となりし所を思ひしがゆゑなり。けふ禄辞し去りて、あすは妻孥等皆々はなれ散りなむ④をもて、我が志のほどは見ゆべき事ぞかし。天もしものしり給ふ事あらむには、それまでの事もあらじものを」といひけり。*総州もいかに思ひ給ひし⑤にやあるらむ、のたまひ出す旨もなく、春すぎ夏たけて、のたまふ事どもありて、「ただいかにもして我が家を去らむ事、思ひとどまるべし」とありしに、されど、また申す旨ありしほどに、秋の初めに至りて明卿（あきのり）

生まれたりけり。

そのほどすぎて、つひに我が請ふ所を許さる。この時におよびて、家に余れる資財をはかり見しに、*青銅三百疋、白米三斗には過ぎず。「よしよし、忽ちに餓うるまでも事もあらじ」といひて、妻孥引きぐして、年頃*師檀のゆかりにつきて、高徳寺にゆき至り、やがて浅草のほとりに宅借りて移れり。なほ一僕一婢のあひ随ひしをも、めしつかふべき助けもなし。「いかにもなりゆけ」といひしに、「おのれら習はぬわざをもなして口もらふほどの事をばいとなみなむ。[5]いかでかはなれまゐらすべき」といふなり。かかりしほどに、総州の舎弟のもとより、使ひして、「さておはさんほどは、一家の人、やしなはれん所をばまゐらすべし」といひ贈り給ひたりけり。是は年頃学文の事など、導きまゐらせし所を、思ひ給ひしがゆゑなるべし。思ひがけぬ事も出で来たれば、その秋の末に、居所をも城東に移したりしに、来り学ぶものも日々に多く、しかるべき人々も、就きて学ばれしすくなからず。

（『折たく柴の記』より）

【注】

*前にしるせし事　土屋家の家中に、頼直の行状が良くないので、かわってその子を当主にしようとする動きがあったが失敗に終わり、白石の父もその仲間と見なされたため、白石も仕官の道を閉ざされた。その後、当主が変わり、白石にもふたたび仕官の道が開けたことを指している。

*筑州の事　筑前守紀正俊が若年寄稲葉正休により江戸城中で刺され、死亡した事件。

*妻孥　妻子、家族。孥は子供。

*経史　中国の書物である経書と史書のこと。

*総州　下総守正仲。

*青銅　銭の異名。

*師檀　寺とその檀家。

問一　傍線部①「れ」②「る」③「しか」④「む」⑤「に」の助動詞の意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　完了　イ　過去　ウ　尊敬　エ　受身　オ　可能　カ　断定　キ　推量　ク　打消

問二　傍線部1「かかる」は破線部ア～オのどの内容をさしているか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　予洲の家滅びしかば
イ　我が仕への途もおのづからひらけたり
ウ　彼の朝臣のもとに出でて仕ふ
エ　家人等を扶助すべき事も意のままならず
オ　我はじめ出で仕へしよりこのかた

問三　傍線部2「心にもあらぬ仕へにしたがひゐたり」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　怒りを抑えながら貧しさに耐えていた
イ　不安な気持ちで出仕をひかえていた
ウ　同情を感じながら忠誠を尽くしていた
エ　心ない仕打ちを受けても出仕していた
オ　不本意にも出仕を続けていた

問四　傍線部3「我が身こそかくまで思ひたち給ひたれば、いかにもおはすべき事なれ」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　あなた自身は、これほどまでに決心されたのだから、どのようにも生きていけましょうが
イ　あなた自身は、このようにしてあきらめられるのなら、どのようにもおなりになれましょうが
ウ　あなた自身は、それほどまでに出世されたのだから、どのようにもお取りはかりいただけるでしょうが
エ　あなた自身は、このように覚悟されたのだから、どのような恥辱にも耐えられましょうが
オ　あなた自身は、このように思い切ってしてしまえば、どのようなお咎めをうけてもよいでしょうが

問五　空欄 A ・ B に共通して入る語の組み合わせとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　A父子・B妻孥　　イ　A妻孥・B父子　　ウ　A従者・B主　　エ　A主・B従者　　オ　A家人・B人家

問六　傍線部4「頼みし人」に該当するものをつぎの中からすべて選び、その記号をマークせよ。

ア　筑前守紀正俊朝臣　　イ　下総守正仲朝臣　　ウ　妻孥
エ　したしかりしものども　　オ　かくまで財力尽きはてし人

問七　傍線部5「いかでかはなれまゐらすべき」を二十字以上、三十字以内で現代語訳し、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問八　この作品は江戸時代に書かれた随筆だが、つぎの中から江戸時代に成立した作品ではないものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　玉勝間　　イ　曾根崎心中　　ウ　世間胸算用　　エ　無名草子　　オ　野ざらし紀行

〔四〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの文章の傍線部A～Dのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

コクモツ[A]の生産とともに、魚介類のヨウショク[B]は重要な産業となっているが、海のオセン[C]などヤッカイ[D]な問題が多い。

問二 つぎの四字熟語A～Dの空欄にあてはまる漢字を、それぞれ解答欄に記せ。

A 品行□正

B 当意□妙

C 二律□反

D 千載一□

問三　つぎのA～Dの意味として最も適切なものをア～エからそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A　鵜の目鷹の目

ア　取るに足らない意見が飛び交う様子
イ　様々な眼差しが交差する様子
ウ　鋭い目つきでものを探す様子
エ　高い所から見下ろしている様子

B　肝胆相照らす

ア　互いに打ち解けつきあうこと
イ　互いに腹の内を探り合うこと
ウ　互いに相手の安否を気にかけること
エ　互いに隠し事をしないと約束すること

C　口角泡を飛ばす

ア　多くの人の前で大演説をする様子
イ　激しく議論を戦わせる様子
ウ　食べることを我慢できない様子
エ　酷い言葉で罵倒する様子

D　ほぞをかむ

ア　秘密にすること
イ　後悔すること
ウ　恨みを忘れないこと
エ　何も手出しができないこと